

●「SHINWA WALK〜伝説そろう歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、戦士の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 6

平景清の伝説

伝説
生き行くも
野望潰えし
景清の
無念たゆたう
あったの大楠



仇討ちのため熱田に潜伏

源氏の宝刀の祟りで失明

熱田区神戸町に景清社という小さな社があります。これは平景清を祀る神社で、眼病の神様とされています。

平景清は、平氏の侍大将・藤原忠清の二男で、平安末期から鎌倉初期にかけて活躍した勇猛果敢な武将。「悪七兵衛景清」の名で恐れられていましたが、1185年、平氏滅亡の壇ヶ浦の合戦で敗れ、消息を絶ちました。しかし、景清は源頼朝のために滅ばされたのが残念無念で、なんとしても仇討ちしたいと、逃れたのです。

景清が生き延びていることを知った源氏方も必死に探索していましたが、それを何とか切り抜け、熱田神宮の大宮司である千秋家の元に現れました。熱田大宮司季範の娘・由良が頼朝の母ですが、実は季範の伯母・池神尼が平頼盛の母であることから、千秋家は源氏とも平氏とも姻戚関係にあったのです。

景清は千秋家から与えられた小さな家に隠れて、頼朝への復讐の機会をうかがっていました。ある日のこと、千秋家ですばらしい名刀をみつけます。それが源氏家に代々伝わる「髭切」と知らされた景清は、「源氏重代の家宝であるこの名刀で頼朝を討つことができれば、これに勝る仇

討ちはない」と考えつき、密かにその刀を盗み出すことに成功したのです。

ところが、日が経つにつれて、景清の身に異変が起きました。両眼の視力がだんだん衰え出して、ついには何にも見えなくなってしまうのです。このままでは頼朝を討つどころか、源氏の追手にみつかったら逃げることもできません。景清は悩んだ末、「これは髭切の祟りに違いない」と思い、その刀を熱田神宮に納めて目が治るように祈願しました。ところが、目は一向に治りません。



▲景清が追手から逃れるため隠れたといわれている大楠。



治療により視力回復するも

討伐果たせぬまま無念の死

そうしたある日、馬島村（現在の太治町）の明眼院の住職が眼病を治す名医であることを聞きつけ、馬島まで出かけて治療を受けました。通ううちに目増しに目よくなり、元のように見えるようになりました。景清はそのお礼にと、戦場で着て手がらをたてた鎧を贈りました。しかし、その帰りに、神宮の境内に入った途端、かねてから景清を狙っていた源氏の追手に囲まれてしまったのです。

視力が回復した景清にとって追手を斬ってしまうことは容易なことでしたが、それでは神宮の境内を血で汚すこととなります。そこで、景清は逃げ回り、大楠の空洞部分に身を潜めて、追手の目から逃れました。夜になって密かに境内から無事逃出し、事なきを得たのです。これが、平景清の伝説です。

景清が隠れたとされている大楠は、今も熱田神宮の手水舎北側にそびえています。樹齢1000年以上の大木で、弘法大師のお手植えとも言われています。

ギリシャ神話で「目」にまつわる伝説といえば、百眼怪人アルゴスの話が有名。全能の神・ゼウスは愛人のイオをかわいがっていましたが、そのことがゼウスの正妻・ヘラに

5th Letter



▲平家の武将・平景清を祀る景清社。

バレて、イオを牝牛に変えて誤魔化します。しかし、すぐにヘラに見破られて百眼怪人アルゴスの監視下に置かれてしまいました。

そこで、ヘルメスがゼウスの命で牝牛のイオを救出するため、アルゴスの退治に向かいました。ヘルメスが魔法の笛を吹くと、99の目はつぶりましたが、1つの目だけが開いているので、話を聞かせることにしました。作戦は大成功。最後の1つの目も眠ったので、その隙に退治しました。

ヘラはアルゴスが殺されたことを知り、百の目を取ってくじやくの羽根につけてやったといいます。くじやくの羽根に目の模様がついているのは、このことが所以だと言われています。

さて景清は1195年、結局は頼朝に捕えられ、翌年断食により死亡。頼朝討伐の野望を果たすことができませんでした。

大楠の前に立ち、熱田神宮を血で汚すことを避けた景清の心配り、そして討伐を果たせなかった無念さを、ゼウスの悪妻として悪名高いヘラの意外な優しさに照らし合わせながら、くじやくの羽根を思い浮かべるのも趣深いものです。

今回は、誓願寺に伝わる「源頼朝の生誕伝説」をお送りします。お楽しみに。

■写真/Kiyoshi K ■イラスト/Rei ■取材文/Icarus